

説教 『 霊の家に築き上げられよ 』

小河信一 牧師

ペトロの手紙 — 2章1節～8節

私たちは、ペトロの手紙 — を読むとき、たとえ、学問的には彼が著者ではないとしても、十二弟子の一人「ペトロ」のことを思い起こします。

彼は、ガリラヤ湖畔の漁師であり、元の名を「シモン」（＝シメオン：「聞く」という原意）と言いました（使徒15:14）。そのシモンが最初の弟子として召命を受けたとき、主イエスご自身からこれからはケファ「岩」と呼ぶことにすると宣言されました（ヨハネ1:42）。アラム語のケファは、ギリシャ語ではペトロとなります。

新約聖書には、二通の「ペトロの手紙」の他、ペトロの二つの説教が残されています。いずれも都エルサレムで行われたもので、使徒言行録3:12-26と同書4:8-12にあります。後の説教では、「この方（イエス・キリスト）こそ、『あなたがた家を建てる者に捨てられたが、隅の親石となった石』です。ほかのだれによっても、救いは得られません」（使徒4:11-12）と力強く語っています。その説教に耳を傾けている会衆からすれば、他の誰からでもなく、「岩」なるペトロの口から再度聞きたいと思うような、ペトロの代表的な説教ではないでしょうか。

そうした中で、私たちはペトロの手紙 — において、「岩」という名の説教者が「生きた石、キリスト」という題で福音を語るという場面に出会うこととなります。使徒言行録4章の説教が、豊かに聖霊の注がれたペトロを通じて、さらに規模壮大な形で展開されていると言ってもよいでしょう。旧約の引用句と併せて、「石」と「岩」とがメッセージの要かなめになっています。

その上、私たちは、メッセージの要かなめである「石」・「岩」が或るものと対比されて、効果を上げていることに気づかされます。そのことは、後で説き明かすことにしましょう。

「岩」なるペトロが巧みに活用した旧約聖書を読みましょう。ペトロの手紙 — 2:6は、イザヤ書から取り入れられています。

イザヤ書28:16-17——

16 それゆえ、主なる神はこう言われる。

「わたしは一つの石をシオンに据える。

これは試みを経た石 ※

堅く据えられた礎の、貴い隅の石だ。

信ずる者は慌てることはない。

17 わたしは正義を測り縄とし

恵みの業を分銅とする。

雹ひょうは欺あざむきという避け所を滅ぼし

水は隠れがを押し流す。」

※ 直訳「試みの石」

初めにここでは、主なる神は、聖なるシオンの家が造り上げられるように、「貴い隅の石」を据えられたうえに、さらに「測り縄」や「分銅」を用意されている、ということが示されています。神が霊的な家を、重厚かつ綿密に仕上げようとされていることが分かります。

次に、本来在るべき霊の家は、「欺きという避け所」に取り巻かれて崩壊寸前であったことが知らされています。霊的の家には、蜘蛛くもの巣のように「死と結んだ契約」や「陰府と定めた協定」（イザヤ書28:18）が張りめぐらされていました。

ところが、うらぶれ果てた掘っ立て小屋が、「貴い隅の石」によって定礎され、雹や洪水が突発するうちに一新されます。漁師ペトロが、キリストに出会った後、初めて預言の書（旧約聖書）に触れ、この個所を聞かされたとき、「果たして、そんなことがあり得ようか」と思ったかもしれません。

しかし、主イエス・キリストの十字架と復活の出来事の後、ペトロは自分の説教に、イザヤ書28:16や詩編118:22の鍵語「隅の石」を採用しました（使徒4:11）。

実際に、いったん捨てられてしまった「貴い隅の石」が土台となって家が再建されたのです。ペトロは、その家の再建が初代教会の成立のうちに成就したことの目撃証人でした。ペトロは傍観者としてではなく、「貴い隅の石」なるキリストを礎とする教会に、一つの「岩」、すなわち、「生きた石」（Iペトロ2:5）として自らも用いられました。

実はペトロは、そのことを主イエスから教えられていました。

マタイ福音書16:18 ペトロが信仰告白した際の、主イエスの言葉――

「わたしも言うておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。」

言うまでもないことですが、たとえペトロが「岩」とあだ名されようが、また或る人が「小石」として用いられようが、教会の中心は、「貴い隅の石」なるキリストです。「わたしは……教会を建てる」と宣言されている「わたし」、主イエスがまことの木工または建築士です。

そのことは、ペトロの手紙 一 の勧めからも明らかです。

ペトロの手紙 一 2:5――

あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。

「霊的な家に造り上げられるようにしなさい」は、今日の説教題において、「霊の家に築き上げられよ」と訳したように、単純な命令です。

私たちが、自分で立案し、自分で頑張って家を建てるのではありません。私たちは、主の前に受身になり切って、「築き上げられる / 建てられる」のです。

イザヤ書28:17-18では、一瞬のうちに雹^{ひょう}や洪水が、人の欺きや死の恐れを洗い流すと預言されていました。今、霊的な家の再建において、私たちは「悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口をみな捨て去る（Iペトロ2:1）ように導かれます。それもまた、私たち、人間の業ではなく、悪しきものを外へ取り去られる神の御業です。

こうして、人の目には、不整合・不適確のように見える、扱い難い石材が組み合わされて、霊の家が築き上げられていきます。さらに、信仰者一人ひとりの霊的な賜物（Iコリント12:1）が差し出されて、多くの部分が一つとなり、キリストの体として成長していきます。その中では、キリストも、私たち信仰者も等しく「生きた石」なのです。

先にイザヤの預言において、シオンに据えられた一つの石は、「試みを経た石」、すなわち、試金石であると言明されていました。

ペトロの手紙 一 2:7-8に基づいて言うならば、キリストを信じるか否かによって、私たちにとってキリストは、「隅の親石」か、「つまずきの石」か、どちらかに分かります。

その「つまずきの石」について、「彼らは御言葉を信じないのでつまずくのです」（Iペトロ2:8）と説明されていますが、ペトロは実際に、つまずいた人でした。彼は、自分の体験をもって、主イエスが「つまずきの石、妨げの岩」（I

ペトロ2:8) となることを知っていました。彼はエルサレムの十字架の丘でけつまずいて、ガリラヤ湖畔まで転がり落ちてしまいました。ペトロの離反を予告されていた主の言葉通りの事が起こりました(マタイ26:31-35,69-75)。幸いにも、その岩なるペトロの転落、「つまずき」は、主イエスがガリラヤ湖に先回りされる(マタイ26:32、28:7)というかたちで押し止められました。水際で、ペトロは回心へと導かれました。

さて、この説教の最初の方で、ペトロの手紙 — 2:1-8のメッセージの要である「石」・「岩」は或るものと対比されて効果的であると言いました。

皆が「生ける石」となって「霊の家に築き上げられよ」という命令を、私たちが実行する際、重要なことは、「隅の親石」なる主イエス・キリストがその命令の実行を支えておられるということです。

ペトロの手紙 — の著者は、そのことを絶妙な比喩で説明し、教会の人々への勧めとしています。

手紙の著者は、「霊の家に築き上げられよ」という主の命令を掲げる際、適切にも、堅固な「生ける石」という比喩を用いました。それとは対照的に、あなたがたが教会全体を支える一部として力を発揮し、あなたがたが揺るがぬように働き続けるために、「キリストを信じなさい」あるいは、今で言えば「日々に使徒信条を唱えなさい」と言ってもよいところ、著者はこう述べました。

ペトロの手紙 — 2:2——

生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。これを飲んで成長し、救われるようになるためです。

固い「石」がやわらかな「霊の乳」を吸う——これは、優れたレトリック(修辞法)です。「石」と「乳」の落差は、ユーモラスです。

私たちは、うわべで「使徒信条」を唱える危険を知っています。自分や自分の欲望を中心に据えようとする罪に引きずられて、内向きに信仰が凝り固まってしまう危険と、私たちは隣り合わせです。「生きた石」ではなく、「白く塗った墓」(マタイ23:27)のように死んだ石になっていないでしょうか。

そのような私たち、「生きた石」に向かって、赤子のようにひたすらに、「霊の乳を慕い求めなさい」と勧めています。

このレトリックは、ペトロの手紙 — の著者のものですが、その教えの根幹、その痛烈さは、主イエス・キリストにさかのぼります。

マタイ福音書18:1-3 天の国でいちばん偉い者——

¹ そのとき、弟子たちがイエスのところに来て、「いったいだれが、天の国でいちばん偉いのでしょうか」と言った。² そこで、イエスは一人の子供を呼び寄せ、彼らの中に立たせて、³ 言われた。「はっきり言うておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。⁴ 自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ。」

信仰とは、ただ一つのことを慕い求めることです。それでは、赤ちゃんが「ただ一つのもの」として本能的に知っている「乳」になぞらえられた「霊の乳」とは、何でしょうか？

それは、「混じりけのない」（Ⅰペトロ2:2）、すなわち、「理にかなった」神の言葉であり、主イエス・キリストが語り成し遂げられた十字架と復活の言葉〈福音〉です。

聖餐式の式文に、次のような勧めがあります。

パンを食べ、杯を飲むときに――

「感謝してこれを受け、主の恵みを信仰をもって味わいなさい。」

恵み深い主（Ⅰペトロ2:3）、イエス・キリストは、私たちの信仰が年経る中でも「霊の乳」を吸い続けられるように、パンと杯を差し出してくださっています。

礼拝の中で私たちは、御言葉により神の真理を、また、聖餐のパンと杯により主の恵みを与えられています。

みどりごのように成長しなさい。

あなたがたは「霊の家に築き上げられよ」！